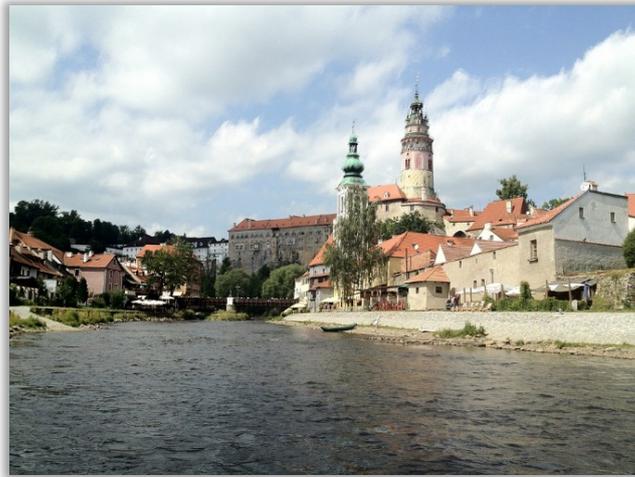


## チェスキー・クルムロフの歴史地区 ～画家エゴン・シーレが愛した街～



いまや、チェスキー・クルムロフは、チェコ観光には欠かせない街となっています。

この街が日本人の注目を集めるようになったのは、15～20年ほど前。その頃からチェスキー・クルムロフに立ち寄るパッケージツアーが増え始めました。この街は第二次世界大戦で戦火に見舞われ、一度、荒廃していますが、1990年代に再開発が進められ、よみがえりました。そのため、観光地としては案外と新しいのです。ちなみに、世界遺産に登録されたのが1992年ですから、符合しますね。

チェスキー・クルムロフは、プラハとウィーンのほぼ中間に位置していて、パッケージツアーの多くは、プラハとウィーンの2都市間の移動の途中に立ち寄るケースが多く、それぞれ片道3～4時間のバスの旅となります。移動に半日かかるので、チェスキー・クルムロフの観光も半日というのが、一般的です。私の場合は、チェコからのバスで入りました。歴史地区では大型車両が規制されているため、下車後、歩いて、チェスキー・クルムロフ城につながる橋の下をくぐり、街の中へ入りました。“登録基準が(iv)”なので、きっと美しい街並みなのだろう、と胸が高鳴りました。清流ヴルタヴァ川に架かる小さな橋を渡ると、期待以上の美しい街並みが現れます。街の中心部のカラフルな色調と裏通りの落ち着いた雰囲気、緑も多く清流に囲まれた歴史地区は、訪れる人たちに安らぎを与えることでしょう。



ヴルタヴァ川に架かる橋

日本からのスケッチ旅行グループが多いのにも、頷けます。しかし、観光地化される前は、絵心をそそるような風景ではなく、この街を題材に描いた著名な画家は、殆どいませんでした。そこで調べてみると、意外や意外、ひとりいました。20世紀初頭に主にウィーンで活躍した画家「エゴン・シーレ」です。彼はこの街に住んだこともあり、チェスキー・クルムロフの絵を数点、残しています。

街中にある「エゴン・シーレ・アートセンター」は、彼を記念して建てられた美術館です。小さな看板が立っているだけなので、観光に気をとられていると素通りしてしまいそうな感じがします。見学に30分間も要さない広さですが、絵画ファンには必見です。彼なりの筆致でチェスキー・クルムロフを描いた絵は、見応えが

あります。描かれた時期が100年以上前なので、今の街並みとは様相が異なり、たいへん貴重な作品だと思います。

私がイメージしていたエゴン・シーレの絵とは違い、なんとなくメルヘンチックな印象の絵でした。また、エゴン・シーレがこの街に愛着を持ったのは、彼の母がチェスキー・クルムロフ出身であったことにも起因しているのでしょう。



エゴン・シーレ・アートセンター



入口前の立て看板

さて、ここで、エゴン・シーレについて触れてみたいと思います。

日本でも有名な画家ですが、モネやミレーのように、多くの日本人が知っているというわけではありません。実は、今年2018年は、彼の没後100年です。生まれ故郷ウィーンでは、彼に因んだ様々な展覧会やイベントが開催されています。日本のどこかの美術館でも、「エゴン・シーレ展」があっても良いのではないかと、私は思っています。エゴン・シーレは鋭い筆致で観る者を圧倒します。題材や質感が辛辣すぎて、目を背ける人がいるほどです。それだけに、私は、彼に興味を持ちました。エゴン・シーレは知らないけれど、この絵はどこかで見たことがある、という方は、結構いるのではないのでしょうか。それは彼の自画像です。ウィーンのレオポルト美術館所蔵の「自画像（1912年作）」です。ホオズキが描かれている、エゴン・シーレファンなら、誰もが一度は目にしたことのある絵です。



自画像（1912年作）

彼の代表作、「自画像（1912年作）」について、考察してみたいと思います。

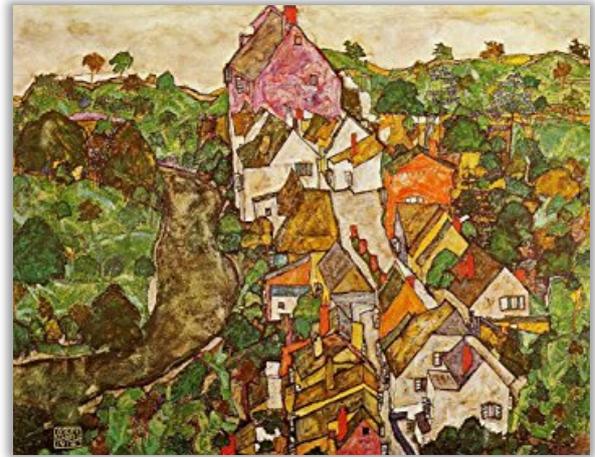
この絵は構図に特徴があります。まず、頭部を切ることによって、画面からはみ出すような迫力を持たせています。顔と体がどちらも逆三角形で、向きが右斜めに傾斜しています。目線も右斜めです。そうすることによって、絵に動きと鋭さを与えています。人物画を描く時、大抵は画面の中心寄りに描きたくるものですが、あえて右上に配置させ、左側にホオズキを描くことによって、鑑賞者の視点を中央に引き戻す効果が生まれます。また、ホオズキの枝を曲線にすることで丸みを出し、これが画面全体を柔らかくする効果をもたらしています。顔と体のシャープさが目立ちすぎないようにしているのです。

では、色彩はどうでしょう。顔と背景の色調が融合しています。一般的に顔は暖色系にして目立たせることが多いのですが、この絵はそれを否定し、背景と同じ色調にして、冷たさ、鋭さを表現しています。観る者に対して、挑戦的、反抗的な感じを醸し出していますよね。と同時に、黒色の目と太い眉毛が、赤色の唇とのコントラストを際立たせ、さらに、ホオズキの赤色も相まって、画面全体に躍動感を与えています。また、葉

の色は黄色系統にして、赤と黒が喧嘩をしない役割を果たしています。この絵に余計な色は使われず、白、黒、赤、黄、少しの青みと基本原色とが巧みにバランスを取り合った、「計算されたプロの絵」と称すべき作品になっています。



1908年初期のスケッチ



1916年に描かれた「クルムロフの風景」

しかしながら、彼が構図や配色をどうしようかとあれこれ試行錯誤して、この絵に辿りついたかと言うと、そうではありません。この絵は迷いなく描かれています。それはなぜか……。

エゴン・シーレはウィーン工芸学校で学び、ウィーン美術アカデミーへ進学しています。10代から20代にしっかりと絵画の基礎教育を受け、構図や配色のバランスなどを理解していたので、自然と描けるのです。



ホテルの部屋からの眺め

エゴン・シーレは、現在もアートのジャンルを問わず、幅広いアーティストたちに刺激を与え続けています。彼の発想力や表現力、生き様は、特に若い世代の心を刺激するのでしょうか。チェスキー・クルムロフを訪れたなら、美しい街並みに感動するとともに、彼の息吹を感じ取ってみてください。

今回はチェスキー・クルムロフの他に、チェコの4つの世界遺産、『プラハの歴史地区』と『テルチの歴史地区』、『クトナー・ホラの歴史地区』の「聖バルボラ教会」を巡りました。それぞれ趣は異なりますが、いずれも絵心をそそられる街でした。街に慌ただしさがなく、のんびりと過ごせる感じがして、テルチの歴史地区では、私も思わず、スケッチしてしまいました。また行ってみたいですね。

沼田政弘